

大智禪師偈頌

鳳山山居（その五）

萬象之中独露身

ばんぞうしちゅう 独露身 ぶくろしん

更於何処著根塵

さら いづ とどころ 更に何れの処にか 根塵を著けん こんじんをつ

回首独倚枯藤立

こうべ ひとり 回首を回らして 独り 枯藤に倚つて立てば ひとり ひとり

人見山兮山見人

ひと やま み やま ひと 人 山を見 山 人を見る

万象之中独露身 という一句は昔、長慶慧稜ちやうけいゑりようという禪師の言われた言葉である。この人は

猛烈な坐禅をして二十年、七箇の蒲団を坐破したという有名な人である。

坐禅は「大用現前なり。声色向上の威儀なり」といわれている。大用現前とは素晴らしい働きということである。時間的にも空間的にも、はてしない働きが現われるということである。僅かに一人一時、この五尺の身体で一瞬間の坐禅をしても、それが純一無雑の坐禅であれば、坐禅は相手がないから邪魔になる対象は一切ない。天にも地にもただ一つの存在、ただ一つの働きになるのである。見るものも見られるものもない。聞く者も聞かれる者もない、拝む

ものも拜まれるものもない。

坐禅は自分だけで相手のない姿勢である。

右の足を左におき、左の足は右におく。右の足は左になり左の足は右になるから、右は右であつて右とも言えぬ、左足も右へおくから左とも言えぬ。つまり相手がない。

「仏法・不二の法」という道理を足の組み方、手の組み方の上で味わせて貰うように出来ているのが坐禅である。

足を組んでしまつたら何処へも行きようがない、此処だけで相手がないから天堂も地獄もない。

手も組んでしまつたら取ることも出来ないし捨てることもならぬ。そのまま宇宙法界をおさめている。相手がないから比べることも出来ぬ。比較対象することがなければ是非、善悪大小、淨穢等の二見は自然沙汰止みとなる。

身体も真つ直ぐにして片寄る訳にはいかないし、口でなんとも言ひようがない所謂これが中道である。

眼も好き嫌いがなければ張らず細めずの自然の開きで眼の色を変えない。

このような二辺対立のない身構えが出来、呼吸が調つて氣勢が充実すれば、正身端坐の不

動の姿勢が最高の活動をして時間空間を超えた無限の世界で働いている、これが大用現前（偉大なる作用そのものの有様）である。

この大用現前の坐禅には主観も客観も隔てようがない。眼耳鼻舌身意（六根・身心）が坐禅で調えられたなら声色香味触法（六境・塵）の相手はどれ程あっても全部坐禅化してしまつて坐禅一つになり、相手である筈の声色等が見えない、これが声色向上とか声色の外といわれる威儀の趣きである。

さて前置きが長くなつたが、

万象之中独露身

更に何れの処にか根塵を著けん

長慶慧稜禅師の言葉をそのまま引用して第一句を起し、宇宙の森羅万象が自分と一体になつた坐禅三昧に徹し切つた風光を頒出されたのである。実に天上天下唯我独尊ともいふべき素晴らしい自己の光明世界の展開である。坐禅はあらゆることに向い合いにならぬのであるから、自己の光明といつても照す対象はなく唯一つの縁の照である。

不對縁すなわち照　その照おのずから妙なり、である。

首を回らして独り、枯藤によつて立てば

人 山を見 山 人を見る

「光を回らし照を返す」という言葉がこの消息である。回らしても返しても相手のない光がひかるだけでこの時、狐明みずから照して本来の面目ともいう実に美しい風光が現われる。それは山も川も草も木も鳥も宇宙の森羅万象のすべてが、自然の一大生命となつて湧躍しているようではないか。

春は花 夏ほととぎす 秋は月
冬雪さえて すすしかりけり

道元禪師はこのように詠われた。